



# 東北ヘルプ ニュースレター

2021年 秋号

- 「東北ヘルプ」10周年の岐路に立って：事務局報告 1頁
- 対談：宮城の被災地から福島を・福島の被災地から宮城を  
2～7頁
- 10年後の原発被災地で、国連の被爆影響調査報告を読む  
——「風化に抗うため」の学びと対話 8～15頁
- 「灰色の世界」と教会の役割  
——地域と共に「今、生きる場」で 16～21頁
- 会計報告 22頁



写真：福島市の吾妻小富士  
(大島博幸牧師 撮影)

# 「東北ヘルプ」10周年の岐路に立って

## 事務局報告

「10年ひと昔」と申します。2011年の東日本大震災から10年が経ちました。こうしてなお、ニュースレターを発行できますことを、心から感謝しています。ここに「2021年秋号」をお送りします。

本号は、発行に苦慮しました。とりわけこの「事務局報告」は、なかなか、書くことができませんでした。それで、例年「夏号」を発刊しているところ、今年は「秋号」となってしまいました。それは、事務局の「リストラクチャリング(再構成)」の作業に足踏みしていたからでした。

2021年6月14日(月)夜、オンラインにて、NPO法人東北ヘルプの総会が行われました。右表にある財務状況を確認し、2020年度も守られましたことを感謝しつつ、「2021年度中に今の事務局体制を解体すること」を、総会は決議しました。そこで、事務局長の責任は、2022年6月に開催される次期総会までに、東北ヘルプ事務局の「次の体制」を模索し、整えること、となりました。

右表にあります通り、2020年度は「約940万円」の収入となりました。ただし、その内「約200万円」は、補助金などの収入でした。ですから、東北ヘルプの献金収入は「約730万円」ということになります。これはとても大きな金額ですが、しかしそれに見合う大きさに固定費等を節減しなければ支援活動の継続ができません。2020年度の支出は「約770万円」であり、これは「前年比約95%減」でした。従って、今再び「事務局のリストラ(再構成)」をしなければならぬ、という判断でした。

2011年に「任意団体」として始まった東北ヘルプは、その事務局を「財団法人」とし、そして「NPO法人」としてきました。その度に、一つひとつ、足踏みして考えました。それは次のことを考える為の「足踏み」でした

「今」私たちに求められていることは何か。それに応える体制は、どんなものか。

10年余の日数を重ねた「今」も、同じ足踏みをしていました。そして今ようやく「一歩」を踏み出せそうな気配がしています。次のニュースレター(クリスマス号)では、きっと、その報告ができると思います。

今回の「2021年秋号」は、福島第一原子力発電所爆発事故の被災地に焦点を当てました。前回の「2021年イースター号」が、津波被災地に焦点を当てて作成しましたから、「順番通り」のつもりでした。しかし、作成して思いました。「フクシマ」の課題は、はっきり「今」ここに 있습니다。そして、それに応える可能性を、私たち東北ヘルプは与えられている。そのことを、今回のニュースレターで、お示しできたように、思っています。

10年を超えてのご支援に心から感謝しつつ、以上、事務局報告を致しました。(2021年8月26日 事務局長 記)

活動計算書			
2020年4月1日から2021年3月31日まで			
特定非営利活動法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ			(単位:円)
科目・摘要	金額		
<b>I 経常収益</b>			
<b>1. 会費収入</b>			
会費収入	21,000	21,000	
<b>2. 受取寄附金</b>			
受取寄附金収入	7,332,281	7,332,281	
<b>3. 雑収入</b>			
持続化給付金	2,000,000		
コロナ関連助成金	41,000		
預金利息	3	2,041,003	
<b>経常収入合計</b>			9,394,284
<b>I 経常費用</b>			
<b>1. 事業費</b>			
<b>(1) 人件費</b>			
職員給与	2,135,200		
法定福利費	117,592	2,252,792	
<b>(2) その他経費</b>			
新聞図書費	351,402		
通信費	459,061		
支払手数料	98,800		
外注費	452,320		
事務費	506,993		
広告宣伝費	832,916		
旅費交通費	314,829		
燃料費	203,898		
会議費	86,892		
支援費	1,781,800	5,088,911	7,341,703
<b>2. 管理費</b>			
<b>(1) 人件費</b>			
職員給与	124,800		
法定福利費	29,397	154,197	
<b>(2) その他経費</b>			
外注費	113,080		
事務費	126,748	239,828	394,025
<b>経常費用計</b>			7,735,728
<b>当期正味財産増減額</b>			1,658,556
<b>前期繰越正味財産額</b>			2,154,718
<b>次期繰越正味財産額</b>			3,813,274

## 対 談

福島の被災地から宮城の被災地を  
宮城の被災地から福島の被災地を

東日本大震災から10年半の日々が経とうとしています。「10周年」そして「オリンピック」といった言葉が、「復興の証」のようにも響いて聞こえた気がします。あるいはそのことが、風化の表れなのかもしれません。

被災地に住んでいても、いつも震災を意識するわけではありません。そんな私たちにとって、風化は、自分自身の何か（気が付くと）失われている、そんな気がして、つらいものです。

どうしたらよいのだろう——同じ経験を違う形でした人同士が出会い、語り合うことができれば、あるいは、自分自身の「内なる風化」にも抗えるかもしれない——そんなことを、考えました。

今回（あえて県別にみるならば）「最大の津波被災地」となった宮城県石巻市の牡鹿半島の先端・鮎川の町に、「原発被災地の中心」となった福島県浜通りから伏見香代さんが訪ねてくださいました。伏見さんは、福島の被災者と共にこの10年余を過ごされた福祉関係者です。宮城の鮎川では「社会福祉法人石巻祥心会くじらのしっぽ」の阿部かよ子さんと多田剛優さんがお待ちくださっていました。

私が聴き手となりまして、お三方がお話くださいました。その様子を、以下にお分かちします。「被災地後の日常」を生きる息遣いをお届けできればうれしく思います。

(2021年8月22日 事務局長 川上直哉 記)

——震災から10年と半年が経ちます。振り返って、どんなことを思われますでしょうか。自己紹介をしていただきながら、お話しできれば幸いです。

## 伏見さん：

福島県の太平洋沿岸「浜通り」からやってきました。私の住んでいる福島県南相馬市には、「野馬追」という伝統行事で有名かと思います。その「野馬追」も、今年はコロナで極端に縮小した開催になりました。震災前は浪江の保健師、震災後は、南相馬市などの「心のケアセンター」で働いてきました。保健師の仕事として浪江町ではB型就労事業所「コーヒータイム」さんの立ち上げにも関わりました。こちらは被災されて、今、二本松市で再開され、頑張っています。

## 阿部さん：

その喫茶店のことは知っています！みやぎセルフ協働受注センター様からの紹介で「3.11 風化防止」の一環でお話を頂き、大阪で活動しているNPO法人トゥギャザー様から取材を受け、宮城と福島で活動している事業所をつないでくれました。

障がい者の就労を継続的に支援します。 福島県二本松市本町二丁目3番地1、NPO法人 コーヒータイム

NPO法人 コーヒータイム

二松市民交流センター内・コーヒータイム

鮎井地区内・OBURI (オブリ)

若宮事務所  
製作室

真がい者の就労を継続的に支援します。  
NPO法人 コーヒータイム

ホームページ お知らせ コーヒータイム 若宮事務所製作室 oburi(オブリ) つながりボールペン お問い合わせ

NPO法人 コーヒータイムのホームページへようこそ。

Information  
NPO法人 コーヒータイム  
【 福島県コーヒータイム 】  
〒964-0917  
二本松市本町二丁目3番地  
二本松市民交流センター内  
TEL:0243-24-8081  
FAX:0243-24-8082

【 若宮事務所 】  
〒964-0906  
二本松市若宮二丁目163-1  
NTT二松ビル3F  
TEL:0243-24-1446  
FAX:0243-24-1447

【 コーヒータイムOBURI 】  
二本松市油井字大塚109-20  
TEL:0243-24-8566

【 メールアドレス 】  
coffee@plum.ocn.ne.jp

カフェ・コーヒータイム

阿部さんと伏見さんとの共通の話題になった  
NPO 法人「コーヒータイム」さんのホームページ



**伏見さん：**

私のいた場所・南相馬市の特殊事情として、震災のために一時、精神科の病院が無くなってしまい、とても困ってしまった人が多くいました。それで、その必要にこたえようと努力しました。そのほか、地域のいろいろな方々と、一緒にやってきた10年でした。

**阿部さん：**

私たちの施設は、今年で20年になります。重度障がい当事者の親の会の皆さんが、学校を卒業してからの故郷での「居場所作り」を現実化する為に牡鹿地域で活動していました。吸収合併前の牡鹿町時代時にその願いが叶いまして、10年が経とうとしていた時、震災となりました。その頃は丁度グルー

プホームも開始し、地域の中での生活を充実してきたところでした。地域は壊滅状態になりました。皆さんの仕事もなくなってしまった。それが「10年前」でした。それから10年間。本当に、皆さんにお世話になりました。今度は地域のお役に立ちたいと、いつからか、そう考えるようになっていました。ちょうどそのころ、地域の産業のわかめ養殖を再開することとなり、私たちにできることはないかと話し合ってみますと「自分たちはわかめの仕事をしていたよ」と利用者さんから声が上がりました。私たちが指導したわけではなく、利用者さんが私たちに指導してくださって、ワカメの作業が実現しました。そして、震災前に実現していた「障がい者当事者の就労」というところまで取り戻せた10年間でした。

**——流されてしまったグループホームは、どうですか？****阿部さん：**

グループホームは法律の問題がありなかなか再建できませんでした。入所希望の方々は、平成29年まで「仮設住まい」となりました。それでもようやく、

グループホームも再建でき、住まいと日中活動するところの両方が再建できました。そして「つい最近、落ち着いた」という実感を持っています。



2021年8月18日「社会福祉法人石巻祥心会くじらのしっぽ」にて、お三方にお話を伺いました。  
写真上左が阿部かよ子さん。写真上右が多田剛優さん。写真下右が伏見香代さん。

——石巻市の中心市街地から、自動車です約「1時間」。ここは牡鹿半島の先端、鮎川の町ですが、中心市街地から離れるにつれて、なにか「タイムスリップ」する感覚を覚えます。つまり、「1年前の復旧工事の様子」「2年前の復旧工事の様子」と、距離を進むごとに、時間がさかのぼるように思うのです。

阿部さん：

そうなのです。この町では、まだ、道路整備もまだ途中で、「まだ道路整備が途中なのか」と、石巻の中心市街地から来た人に驚かれます。まだまだ、工事は続くようです。町が落ち着くまでは時間がかかり、そしてその中で高齢化はどんどん進むのではないかと同時に、住む世帯数が少なくなっています。「親亡き後も、自立した楽しい生活を送れるように」と、私たちは障がい当事者の方々と努力を続けています。おかげさまで、施設利用者の中に「居心地が良い」と思ってくださいの方もおられます。中心市街地の方から、「往復2時間の送迎」を利用して、私たちの施設に通所している人が4人いらっしゃいます。本当に励まされます。

——施設の定員と充足率はどうですか？

阿部さん：

定員は20名で現在充足しています。この地域は比較的広い住居を皆さんお持ちになっていて、住む場所には恵まれています。そうした中で震災になり津波を受けて、住居環境が変わり居場所をうしなった在宅の障がい者もいました。そうした中で、仮設住宅での生活をする日々となり人恋しさも募るので、そうした声が地域から、私たちのところに届くようになりました。そうした声を私たちは精一杯応

——この被災の激しい場所で、新しい日常が、嬉しいものとして展開しているのですね。

阿部さん：

はい。「役割」がここにあります。そのことが、生きる力にもなっています。年齢・障がいの程度を問わず「挑戦したい」という思いをサポートしながら頑張れば、少しずつ「対価」も発生しています。それは、利用者にとって、驚きになり、自信にもなっています。その環境がお互い助け合う気持ちに繋がり、交わす言葉も柔らかくなります。そうして、いつのまにか協力的になるご家族の様子も見てきました。ここはさらに児童クラブもあり、親御さんが迎えに来ます。隣には牡鹿地区保育所があり、小さな子どもたちがこの敷地内を散歩しています。また同じ建物の中には高齢者が介護予防の活動をしています。そうした中でコミュニティが生まれ、色々な世代の



じられるように各方面と協力してきました。すると嬉しいことに、そうした人々の表情が変わり始めたのをよく覚えています。今でもその表情の一つ一つに驚いています。ただまだ社会には難しい現実がありますが、毎日過ごす中で、精神疾患をお持ちの方々が楽しく笑顔で活躍している姿が本当に嬉しく思います。

人々が健常者も障がい者も互いに挨拶をし、世間話をしている普通のことの様になっている環境は「いいな」と実感しています。



「社会福祉法人石巻祥心会くじらのしっぽ」と共に保育所なども設置されている 石巻市鮎川の「福祉タウン」

——阿部さんは、この土地を故郷としておられます。その「ふるさと」への暖かく強い思いを、お話の中に感じました。そして、この施設で、震災後に、県外出身者として奉職して下さっている多田さんも、ここにおられます。是非、何かお話しく下さいませんか。

多田さん：

はい。私は平成25年から、つまり震災の2年後に、この「くじらのしっぽ」に異動してきました。大学は石巻で機械科に学びましたが、いまは福祉の専門職となり現在は鮎川の施設で働いています。ここで働き、利用者さんが生き活きと楽しそうに過ごしているのを目の当たりにして、いつも励まされて

います。おかげさまで、施設の利用者も増えてきています。そして、利用者数が増えると、その皆さんがこなすべき「仕事」も増やさなければいけません。私達職員の役割はそこにあります。日々私たちは利用者が少しでも来たいと思う事業所を目指し頑張っています。

——石巻に移住して定住して下さった。それも困難な「被災後の日常」を、私たちと一緒に過ごして下さった。10年経ったこの石巻、その中の牡鹿半島、そしてその中心になる鮎川の町を、どんな風に見ておられますか。

多田さん：

震災から10年。そうですね。私が来た8年前の時は、まだ「震災当初」という感じでした。その時と比べると、「前向きに」進んでいるように思います。「過去」を後ろに残して、震災を忘れていくというわけではないのですが、それでもとにかく、今はも

う「前を向いて活動している」という気がします。例えば8年前、精神の障がいと共に生きている方々を思い出すと、震災当初入院していた方の中には、「ここに来てから、もう5年以上入院しないで済んでいる」と喜んでいる方もいます。

——伏見さん、宮城県の津波被災地に、どんな感想をお持ちですか。

伏見さん：

実は、福島県外の被災地は、初めてでした。「他所を見たら、自分たちの被災状況を小さく見てしまうのではないかと」思って、なんだか怖い気がしていました。「身近の方々への配慮が弱くなるのではないかと」、怖かったです。でも、ついに今日、福島県を出て、この石巻の津波被災地を拝見しました。

し訳ない」と思ってきました。それから、福島に住む私の周囲の人は「宮城は復興が進んでいる」と言っていました。でも、今日、ここに来る途中、川上先生から色々な説明を聞きました。そして「やっぱり、そんなことない」と分かりました。復旧を進めて行く時間が「まだら」に進んでいることが、よく分かりました。

阿部さん：

「怖かった」というお話は私にもよくわかります。震災後の3～4年目のことを思い出します。その時まだ、仮設住宅にお住まいの方々も多数いましたが、石巻市内で生活していた人の中には「震災の影響が少ない人」も、たくさんいましたので、そのギャップは大きかったです。そうした人々の中には「悲惨な様子」を映像だけで知っていた人もいました。「いつまで震災、震災と言うのか」という言葉を、私は実際に、何度も、聞きました。その都度、怒りとがっかりを覚えたことを思い出します。「もう、この人とは話したくない」と思うほど、心が暗くなったのです。

多田さん：

確かに、一昨年くらいから、ここ鮎川のある牡鹿半島も、道路整備も進み「きれい」になってきました。でも完全な復旧は、まだ先だと感じます。

阿部さん：

そして、復旧の工事が進むにつれて景観が変わって行くのです。半面それはつらいことでもあります。震災前の自分たちの町が恋しくなります。たとえば私の母は82歳です。お墓がここに 있습니다。その母の家、私の故郷の家は無くなりました。今、その場所には堤防があるのです。ですから、私も母も、故郷に帰るのが辛くなっています。「復興」へと工事が進みますと辛さが増すのです。「きれい」になるほど言葉も失われていく。そんな感じです。

伏見さん：

「福島が大変」と言うと、「福島ばかり」と思わせることになるでしょう。そのことも、どうにも「申

伏見さん：

残された風景が、複雑な思いを喚起するのですね。



## ——「石巻の牡鹿半島の鮎川」から見える「福島」は、どんな感じでしょうか。

阿部さん：

「福島には行ってはいけない」という思いを持っている気がします。自分たちの故郷は「壊れて無くなり、別世界になっている」という感じです。もう戻せない。それは辛いことです。でも、「福島」を巡る情報に触れると、私たちとは違う「辛さ」がそこにあることを思うのです。「そこに故郷があるのに戻れない」という感じです。それは、悲しいことだと思います。色々な情報が錯そうする中で、軽々しく当事者に尋ねることはできない。「あるいはきっと、割り切れないだろうな」と思うのです。

伏見さん：

原発事故現場の周囲数十キロについては、この数年、毎年毎年、立ち入りが許可される範囲が広がっています。

阿部さん：

でも、10年経ってしまったら、もう戻れなくなった人もいますよね。

伏見さん：

はい。そして、戻っている人も、いるのです。そして、新しく来てくれる人もいます。その上で「立ち入り禁止」のままの所も、あります。そうした場所には「一時帰宅」があるだけです。そして震災時からそこに残された建物は、ほとんど解体されています。そうして「更地」になってしまっていて、そこがどこであるかも分からなくなってしまう、ということも、まま、あります。



浪江町の「津波と原発」の被災地域

## ——福島と宮城で共通する懸念事項として、「原発の汚染水／処理水」がありますね。

阿部さん：

はい。海の稼業の方とはとにかく原発からの放水が心配だとおっしゃっています。保障があるとされるけれど、風評被害に対しては心配が募っています。なんとも「やりきれない」という思いがするのです。私たちの事業所でも、海水から塩を作っています。どうしても、「影響があるのでは」と思うのです。牡鹿半島産のわかめは他の所とは違うと評判になっています。ただ利用者さんの収入に影響がでるのではという心配もあります。

多田さん：

実際「福島産のもやし」などをスーパーで見ますと、「他の物より安い」と思っています。同じく「おいしいもやし」なのに。原発事故の影響は、色々な形で、ずっと残るのだと感じています。

阿部さん：

牡鹿半島には女川原発があります。そこで万が一事故があったらと思うことがあります。私たち牡鹿半島に住むものとしては、逃げ方がわからないのです。原発事故があったら、避難できないのが私達の地理的環境なのです。実際に原発については「反対／賛成」ではなくて「わからない」のが現状です。本当に、震災は風化させてはいけないしまだ完全に

復興はしていません。そうした中で、私たちは、原発事故の恐さや被災地の実態をもっともっと知らないといけないと思っています。



東京新聞 2020年11月12日

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/67850>

伏見さん：

私の体験をお話しします。浪江で被災しました。原発事故現場から7キロの地点でした。当日は、地震を受けて体育館に集まった人であふれていました。道路も車であふれています。夜になり「3キロ圏内に非常事態宣言が出た」と、人づてに聞こえてきました。朝には「10キロ圏内が非常事態宣言」となったのでした。その時、「だいじょうぶ、落ち着こう」と語り合っていました。避難しようとして気づきました。逃げる道は、一本しかなかった。とにかく、自動車で「30分」で到着できるはずの津島という所へ向かいました。でも、渋滞で動けず、「3時間」以上かかりました。その後、当日の夜に、やっと、固定電話で家族とつながることになりました。

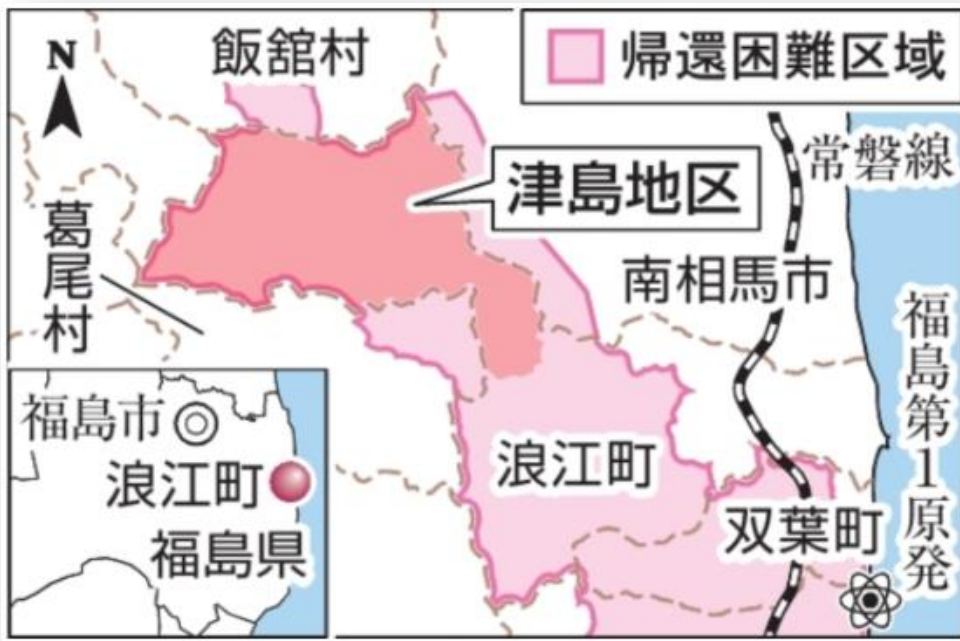
日は、情報がなくて、たまに携帯電話に電源が入ると、いろいろな情報が入ってくるのです。不思議なことがいろいろ、入ってくる。そして、現場には「言えないこと」もたくさん起こる。そういうのが、現場だった。

阿部さん：

大切な話をありがとうございます。私も、自分の体験したことについて些細な事でもできるだけ語り続けていきたいと思いました。そうして自分が忘れないようにしたいのです。

伏見さん：

大切なのは「聞いてくれる人」がいるということだと思います。「聞いてくれる人」がいないと「話す機会」がなくなってしまいます。



河北新報 2020年10月07日

<https://kahoku.news/articles/20201007khu00000080000c.html?format=slide&page=2>

阿部さん：

「自分たちが発信者にならなければいけない」と、福島と宮城をつなごうと企画してくださった関西のNPO団体の方に出会って、私も気づかされたことがありました。発信する機会を無くさない様にしたいです。実際、被災後の私たちのこの場所を訪ねてくれた人がたくさんいました。その人たちが、あらゆる手段で私たちの存在を各地に伝えてくれました。そしてこの事業所が動き出して以来、たくさんのお力を寄せて頂いています。それは結局地域の協力の結晶が全国に伝わっているのだと思います。

阿部さん：

情報が通じなくなっていたのですね。それは私たちでも同じでした。実際に防災無線すらこちらは通じなかったのです。情報がなくて困りました。

伏見さん：

はい。それで、実感しました。「半径五メートル以上は助けられない」とわかったのです。実際、お年寄りの水分補給にも苦労したのを覚えています。当

伏見さん：

語り残さなければならないこととして、もう一つ、思い出します。「逃げるができなかった方」も、たくさんいたということです。障がい者、寝たきりの方、仕事がある方、そうした方が、逃げる時どうするか。それを、平時から問い続ける。そうすることが、災害の中で悲劇を抑止する力になるのだ、身を守るのだと、これは現場で必死に努力した方が言っていました。

——ありがとうございました。このニュースレターを通して、みなさんの「言葉」が、少しでも広く、一人でも多くの人に、伝わっていきますよう、私たちも頑張りたいと思います。



## 10年後の原発被災地で、国連の被爆影響調査報告を読む

### 「風化に抗うため」の学びと対話

東北ヘルプは「支援者を支援する」団体です。津波被災地でも、原子力災害の被災地でも、それは同じです。原子力災害の被災地で、支援者は、今、何をしているのでしょうか。

私たちの知っている限り、支援者は「風化に抗う」努力を続けています。問題は、まだ、何も解決していないのです。でも、問題がどんどん見えなくなっていく。あるいは「見えなくされている」のではないかと、なんとなく、不安になる。子どもたちには、異変が起きている、気がする。それもまた、よく見えない。——そうした中で、踏みとどまって、現実を見つめようとする「お母さん」たちがいます。子どもたちの未来を守ろうと、その努力は続けられているのです。

私たち東北ヘルプに、そんな「お母さん」たちの、何を、どうやって、支援できるのでしょうか。10年間、ずっと、考え続けてきました。力不足を痛感しながら、ただただ多くの方に支えられながら、試行錯誤は続きます。

今回、また、ひとつの試みをしてみました。宮城県と福島県の「お母さん」たちが会うこと。そして、原発被災者を支援し続けてきた長野の支援者が、その出会いに参加すること。そしてそこで、第三者の視点から取り出される学びが共有されること。そんなことを目指して、2021年8月6日、オンラインで、ひとつの会議をしました。

福島県から、「TEAM ママベク」の千葉由美さんと、内田ゆかりさん。宮城県から、嶋原敦子さん。そして長野県から井上儀一さんが、参加くださいました。四名の皆さんは、2020年に国連が出した福島第一原発事故の報告書を巡って、話し合いをしてくださいました。以下に、その会話の様子をお分かちします。

10年が立った今、原発事故被災地は、いったい「どうなっている」とされているのか——それを知ることは、私たちの内なる風化に抗う手がかりとなると思います。どうぞ、ご高覧ください。

(2021年8月24日 事務局長 川上直哉 記)

——この10年を振り返りながら、自己紹介をしていただけますでしょうか。

千葉由美さん：

震災前の話です。自分の子どもが、アトピー性皮膚炎となりました。それがきっかけで、環境問題を勉強しました。そうしてたどり着いたのが「ケミカルに頼らず、自然療法で治す」ということでした。そして「結局、自分が作ったものが安全」だと気づき、自然療法を学び、半自給自足をしていました。薬草を工夫して、治療に取り入れ、その延長線上で、ワークショップをして学びを共有してきました。ですから、震災の前から、環境



「いわき食品放射能計測所・いのり」からオンライン参加される千葉さん

問題の延長線上で、放射能の危機感をもって、子どものことを考えてきたということになります。

原発事故がありまして、その後すぐ、「いわきの初期被曝を追及するママの会」を始めました。「子どもの環境・土壌汚染モニタリング」「コミュニケーションと情報共有」といったことをしてきました。実際には、楽しい「お茶会」をして、心を通わせ「お母さん」仲間を作り、そしてみんなと一緒に「母親としての声」を行政などに届けてきました。そして10年経ちました。去年から、私たちは「いわき放射能計測所・いのり」で、計測作業を展開しています。

#### 内田ゆかりさん：

震災前、幼稚園で働いていました。子どもたちに危険なことが及ぶことを職業柄、いつも気を付けてきました。夫の転職が決まって、茨城県へ転居することになっていましたが、その直前に原発事故となったのでした。それで私は、事故後すぐ、いったん福島県外に出て暮らすことになりました。そして引っ越し先で「事実」が伝わってこないことに気づきました。その後、福島県に戻ることになりました。そこでつながりを求め、千葉さんたちに出会い一緒に今日までやってきました。今は放射線量の測定事業にも参加しています。「事実」と向き合いながら、今日まで、やってきたと思います。



「いわき食品放射能計測所・いのり」からオンライン参加される内田さん

#### 嶋原敦子さん：

震災当時、大学で非常勤講師をしていました。研究者として過ごしていました。社会学と、国際関係論を学んでいましたから、途上国の環境問題をずっと見つめてきました。国が経済成長を追求する時、その周辺では環境問題が起こり、そして貧困問題が見捨てられて行く。そのことを見つめて、問題意識を持っていたのです。でもそれは、私にとって「海外の問題」でした。そして、原発事故が起きたのです。「放射能の環境問題」が、足元で起きたことに、ショックを受けました。つまり「自分の問題」として、そこから捉えなおしたのです。事故までは身近の環境問題は見えなかった。その点からしますと、先ほどのお話を伺って「千葉さんはすごい」と思います。

研究活動の中で、公害においていつも同じことが繰り返されることに気づかされていました。公害とは「国が加害の側に立つ」という問題です。国家権力が加害者となった時、いつも国家権力は、被害を小さく見せる、ということです。たいしたことないという言説が積み上げられる。いつもそうだとすることは、それは、歴史において証明されています。ミナマタ病でも、つまり、日本国内でも、それは変わらないということです。核被害においては、日本を含む全世界、同じことが展開していました。ですから私は、原発事故を受けて、危機感を募らせました。

私が参加している「かたつむりの会」について、紹介させてください。私は宮城県沿岸部に住んでいます。岩沼市という場所です。宮城県の南部で、原発事故現場からはおよそ「70 km」くらい離れたところですが、宮城県ですから、福島県ではありません。でも、事故現場からの距離で言いますと、福島市やいわき市の一部と、あまり変わらない距離ということになります。震災後、私はずっと宮城県にいて、津波被害の対応が大変でした。その被災対応に追われている中で、農家の方などから「福島県からの不安の声」が聞こえてきました。そして「私たちも甲状腺検査をやりたい」というお母さんたちがつながったのです。そしてできたのが「かたつむりの会」です。宮城県南部の白石市や角田町などで線量の測定活動をして、行政に請願書を出したりしてきた仲間が集まりました。その時、「小さなグループが横につながっていった」ことが、印象的でした。

「かたつむりの会」は「検診活動」を続けてきました。それは2012年から始まりました。鹿児島県に在住のお医者様の協力を得たのです。そして昨年、女川原発「再稼働」の方向が示されることになりました。そうした動きが見えてきたところに、「今こそ宮城の被害を残そう」と、『3・11 みやぎのきろく みんなのきろく』という記録集を作ることになりました。今、その冊子ができて、ほっとしています。



宮城県仙台市からオンライン参加される嶋原さん

「県が違う」というだけで、原発災害の被害が、どんどん、見えなくなる——その現実を実感して

きました。そういう状況の中で、宮城県に住むものとして、どうやって、自分たちの環境を見極めていけるか。そうした問題への関心を持っている人々と共に活動してきた10年だったと思います。

#### 井上儀一さん：

私は長野県小諸市で「小諸母子ホームステイプログラム」という活動を続けて、福島原発事故とかわりを持ってきました。今、「新型コロナ」を巡り日本政府はバタついてるように見えますが、それと同じことを、10年前の原発事故の時に見たと思います。その時「切り捨てられる人々が危ない」と認識しました。そして事故の年の3月に、近くの教会の牧師と一緒にサポート活動を始めたのでした。今まで、トータルで数えると、3500泊くらい、短期のホームステイを原発事故被災者に提供してきました。いつもたくさんのご家族が来てくださっていたのに、去年はコロナの中で、それも、できなくなってしまった。残念です。ただ、ホームステイ以外の活動もあり、それは続けています。たとえば、ホームステイを利用してくださった方の中で「移住したい」という方々も出てきたので、そのサポートをしてきました。また、事故の年の秋に、食品汚染が大きな問題となり「お米」がとても心配、という声があ

くさん聞こえてきました。それで、小諸の農家と一緒に、こちらのお米の宅配をしてきました。それは展開しまして、今は、野菜も果物も、月に二回、宅配しています。そして野菜の宅配を始めた頃のことです。「これから必要とされる事柄がどこにあるか」を真剣に考えました。川上さんと出会ったのも、そのころのことです。福島市のルーテル教会がその検討の拠点となりました。そして、福島県キリスト教連絡会の「放射能問題学習会」が始まりました。そこに参加して、第三者的な立場から見えることを共有して行こう、と、かわりは展開したのです。そして、今回はその延長線上にあるのだと思います。



長野県小諸市からオンライン参加される井上さん

——この10年を経て、原発事故はどうなったのでしょうか。井上さんに、国連の報告書を用いて、お話しいただきます。

#### 井上さん：

はい。私は、大企業、半導体関係の仕事をしていました。後半の会社生活は、事業戦略策定に携わりました。半導体という分野は国際的な競争の激しいところです。それで、国際戦略を練るためにはグローバルなデータを集めて、分析してゆることが必要です。私の仕事はそうしたことに集中していました。そうして培った経験を踏まえて、2011年の原発事故を見ると、また違うものが見えるのではないかと、そう思って、かわり続けてきました。

「お母さん」たちは、混乱させられて、苦しんできました。情報が多すぎて、混乱してしまうのです。国家が情報について、誘導するように情報を捻じ曲げてくるのです。ホームステイにお越しになった「お母さん」たちが、それで、迷っているのを目の当たりにしました。それで「側面支援」ができないかと思いました。正しい情報・フィルターがかかっていない情報・信頼性が置ける情報を集めて、

事業戦略を立てるように分析をして、それをみんなで共有する、ということができないか、考えてきました。

福島市で、子どもたちを被ばくから守る活動を、市内の教会の皆さんと一緒に始めました。そこで行動する「お母さんたち」と出会った。ふと見ると「お父さん」たちは、どうしたらよいか分からずに「おろおろ」していました。それで、意志決定と行動のためには「お母さん」がカギになると気づきました。では、どうやって「お母さん」たちと一緒に意志決定し行動を起こせるか。ずっと、悩んできました。

そして、「原発事故を見えなくして風化させようとする動き」が確かにあるのです。どうしたらよいのでしょうか。それで、今日は「風化にどう対峙するか」というお話をしようと思いました。今日の私のお話のスタンスは「対峙」という言葉に表現されています。私たちの立場をまず明確にして、向き合うべき相手と向き合う、ということを考えています。「相手の中に入って、相手の立場で考える」ということも、あると思います。でも今日は、そうではなく「対峙」という方法で、考えてみたく思います。今日は特に「アンスケア報告」という国連の2020年の報告書についてご紹介して、原発被害の風化に対峙する私たちの現状を共有してみたいと思います。



## ——国連が、福島第一原発の爆発事故について、調査して報告をしているのですね。

井上さん：

はい。「アンスケア」というのは、「原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）」という委員会です。そこが提出する報告書が「アンスケア報告」です。2020年にも最新版が出されました（その正式名称は「2011年東日本大震災後の福島第一原子力発電所における事故による放射線被ばくのレベルと影響：UNSCEAR2013年報告書刊行後に発表された知見の影響」といいます。日本では2ページの概要書が日本語で出ました。そこには福島第一原子力発電所事故の影響評価が掲載されています。そのポイントは「見られそうにない」という表現にあります。「放射線被ばくが直接の原因となるような将来的な健康影響は見られそうにない」というのです。これが国連の「10年の節目」の報告書です。権威ある、強いインパクトを持っている結論です。それが、「放射能の影響は大したことない」というメッセージを出している。この結論に至る報告の、その論理は、どんなものでしょうか。

## ——英文で報告され、日本語では概要だけが発信されているのですね。

井上さん：

そうなのです。ではまず、英文で提示されている報告書について、分析をしてみましょう。特にここでは「甲状腺がんは被ばくを原因としていない」というポイントに絞って、分析をしてみましょう。もちろんそれは「白血病」などにも敷衍される分析となると思います。

まず大切なこととして、確認すべき事実があります。それは「放射性ヨウ素の“実測データ”は、信頼できるものが、ほとんどない」ということです。実測データは、存在しないか、あっても混乱したものです。ですから「信頼性が低い」。当然、それは国連のアンスケアも使っていない。それで、「シミュレーション」と「モデル」で検討して、そうして「被ばくの推定」が出てくるのです。ここにまず第一のポイントがあります。つまり「シミュレーション」と「モデル」のパラメータを変更すると、その結果は大きく変わる。それがこの報告書を読むポイントとなるのです。

では、その推定の流れはどうなっているのでしょうか。以下に確認してみましょう。

まず「被ばくは、吸入による」とされます。そして「緊急時迅速放射能影響予測システム（SPEEDI）」という日本のシステムを使うこととなります。そして「人の動き」をそこにかき合わせ、さらに「吸入されたものでどれほど被ばくしたか」を検討して、「被ばくの推定」を行う。この「推定」のために「内部被ばくモデル」を作る

それを理解して、表面的な理解を超えて、風化させようとする意図・作為を理解し共有することがまず、大事なことだと思って、以下にお話いたします。それを踏まえて、そして、何をすべきか。考えてみたいと思います。



日本政府のホームページによる「アンスケア報告」についての発信

わけです。それでは、それを見てください。「2013年版」にも報告書が出ていました。今回の「2020年版」と、この「モデル」を比較してみますと、「推定される被ばく量」が半分になっています。なぜかな、と探りますと、日本人固有の「食生活」と「住環境」を考慮して「最も小さいパラメータ」を用いているからだ、とわかります。

以上のように「被ばく推定」が出た上で、さらに、「リスク評価」がなされて、報告の結論が出てきます。では、この「リスク評価」は、どうやって行うのか。それを見てください。まず、「被ばくしない自然発生の発がんリスク」を取り出します。そしてそれと比較して「識別可能」かどうかを、統計学的に判断する、ということになります。ですから、「比較の対象」次第では「識別可能ではない」となるのです。そして、「比較の対象」は、「生涯のがんリスクの総和」を持っています。つまり「原発事故で被ばくしたとしても、その人がもし80歳まで生きれば、そんなにリスクに違いはない」ということになる。でも私たちは「この子どもが十代でがんになるリスクはどうか」を心配している。そうした心配には全く答えない「リスク評価」となっているのです。もし「十代ではどうか」と考えて、同じモデルで検討すると、最新の情報を用いると、はっきり、「被ばくした子どもはがんリスクが高い」という結論が出てきます。そうした問題は、おそらく意図的に、見えなくされているのだと思います。

——分析を伺うと、「数値を小さく見せる努力」が施されているように感じます。

井上さん：

昔、オクスフォード大学でコンピュータサイエンスを学んだことがあります。その時「論理学」を重要な事柄として身に着けました。その最初の教科書が「統計学で、どのように人をだますか」という本でした。。今、この分析をして、そのことを思い出します。実にこの「アンスケア報告」という国連の働きは、まさにその典型例となるものだと思います。そして、日本語の翻訳でも作為が感じられます。この報告書は英語で「特別なリスクは識別できない」と書いているのに、それを「見られそうにない」と日本語で書いてしまう。これは、翻訳ではなく、新しい「表現」です。風化させようとする意図が、そこに感じられるのです。不都合なイメージの切断が目指されているのだと思います。そして、この「アンスケア報告」を受けて、環境省が「福島県の安全性の第三者機関による確認がなされた」として、これを用いている。そう思います。

実際は、どうなっているのでしょうか。2015年まで、「国立がんセンター」の資料が公開さ

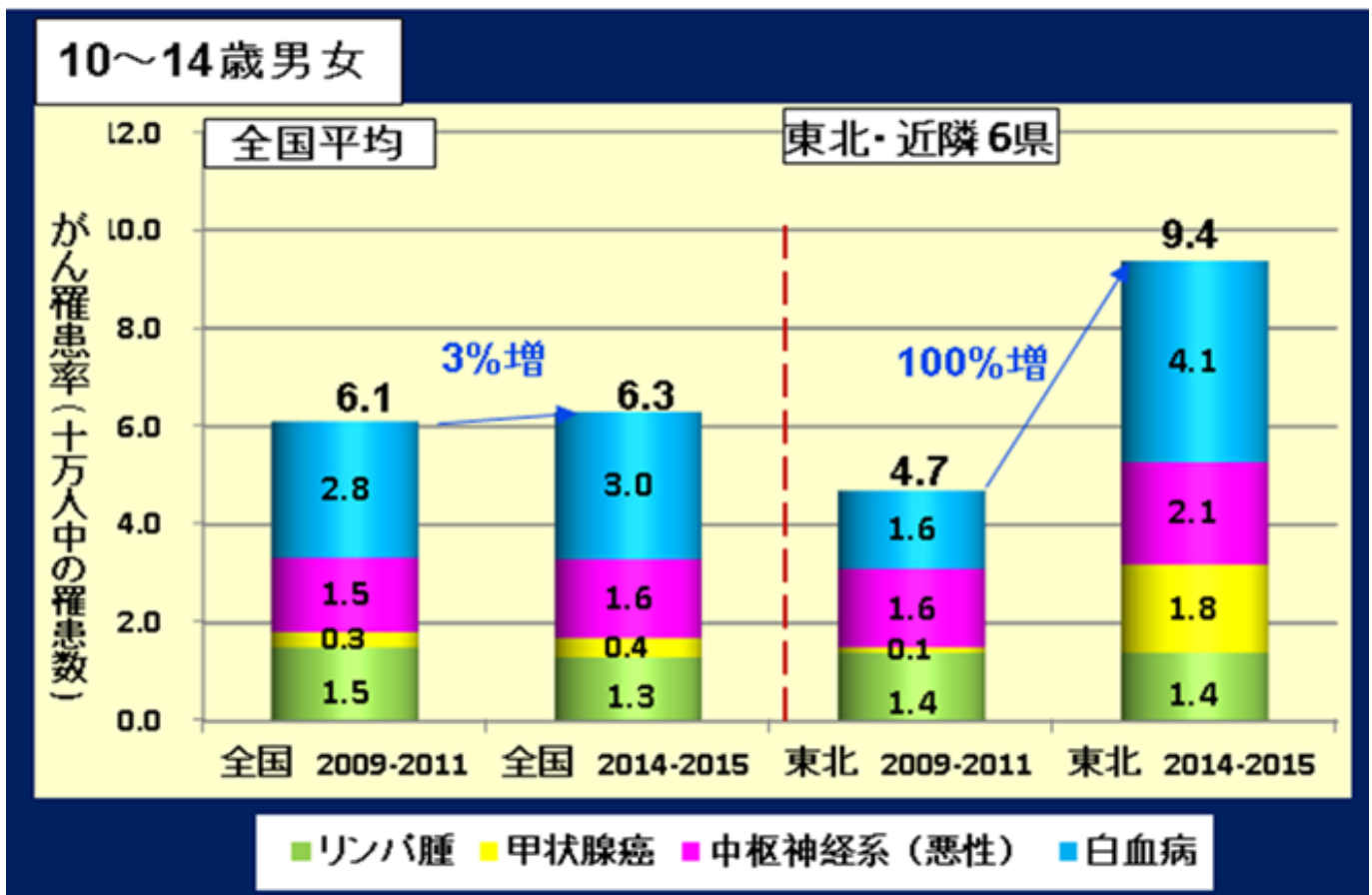
れていました（なぜか、2015年以降はそのデータが見つかりません）。その分析をしてみますと、

- 「2011年に放射能の雲が通った地域」の
- 「2009～2011年」と
- 「2014～2015年」を比べると、
- 「10～14才」の男女で、
- 「10万人中のがん罹患率」の数値が、
- 「100パーセントの増加」を示す。

ということ、などが分かります。

（下のグラフをご覧ください。）

それでも、この報告書には、積極的な内容もあると思います。私たちは、ずっと、「放射能災害の減災」の努力をしてきました。どうやって子どもに被ばくの影響を残さないようにするか。そうした私たちの努力の成果を確認できるデータも、この「アンスケア報告」には、見られるのです。それは、たくさんあると思います。これから、私たちの10年間の活動の評価として纏めてみようと考えています。



がん罹患率は、モニタリング期間の年間平均。リファレンスに事故前(2009～2011)の全国平均掲載

——今、井上さんは、「10年後の原発被災地」がどうなっているか、国連の「アンスケア報告」から、お語り下さいました。そこから、「では、これからどうするか」へと、話を進めましょう。まず、この報告書にも「価値がある」と、井上さんがおっしゃいましたことは重要だと思いました。つまり「30歳くらいまで生き残れば、その後は、被ばくしていても・いなくても、リスクにあまり違いがない」と、そのことも、この国連の報告書から読み取れるのですね。ということは、「そこまで生き残る」ことが目標となる、とも言えるかと思います。他方で、「2015年まで」しか、がんに関するデータが「見つからなくなった」という現実を重く見えています。「特定秘密保護法」が施行された以上、「何が秘密になるか分からなくなる」世界を生きている私たちです。その現実の重苦しさを思います。



聞き手は川上が担当しました。

#### 井上さん：

事故後4年目頃のことです。ホームステイに参加して下さった20人くらいが集まって、ゆっくり話し合う機会がありました。そこにアメリカ人女性がボランティアで参加しておられて、「お母さん」たちのお話に参加して下さいました。米国でもスリーマイル島の事故が起きたのですが、それを契機にして、米国の「お母さん」たちが活動をし、語り合いを続けているそうです。そのボランティアの米国人はその活動にかかわっておられたそうで、米国と日本との「お母さん」たちの様子があまりに違くと、驚かれて「日本の皆さんは、まるで『隠れキリシタン』のような雰囲気ですね」と言っていたのです。

米国では、オープンに議論できる。私たちは、短期保養に参加することも憚れている。この違いは大きい。そして、その中で、次の世代をどう守るか。それが課題となると思っています。

#### 千葉さん：

井上さんのお話を聞いて、色々考えています。ひとつ、現実的な現場の話をして。お母さんたちは、必死になって守ろうと、最初は、頑張った。具体的に動いた。けれど、3年目には、もう、意識は低下していました。今はどうでしょうか。原発事故当時「子育て世代」だった方々は、育てていた子どもたちがもう「高校生・大学生」となっています。それで、その方々は「その時は過ぎた」という感じになっています。そして、原発事故当時に学生だった人たちが今、子育てをしているのです。そうした中で、今、原発事故そのものについて考える「きっかけ」が奪われているように思います。たとえば「アンスケア」という言葉も、聞いたことない人が多いでしょう。「難しい、ハードルが高い」と感じてしまうと思います。でも、それによって、自分たちや次の世代の未来が大きな影響を受ける。だから、「難しい、ハードルが高い」事柄を、どうやって「自分事」としてもらえるか。それが、自分たちの課題となっているのだと思います。

私は「はっぴーあいらんど☆ネットワーク」の

メンバーとしても福島県全体をつないで動いています。そこでは国際的な動向や県民健康調査も監視していますが、最近では、福島県が実施する学校での甲状腺エコー検査について、危惧を持っています。その検査の検討委員に環境省からの職員が入り、「学校での検査をどうやって縮小させていくか」について議論を進めてしまっています。それは「見えない化」を進める暴走だ、と思うのです。それをどうやって止めるか、ということを考え具体的な動きを起こしています。

そうした大きな動きが求められる一方で、「小さな個別の動き」も必要です。個別の具体的な現実として、お母さんたちが、こうした議論に加わって下さいません。「深刻さから逃げたい」という気持ちが潜在的に働いているのです。それで、私たちは一人ずつ一つずつ丁寧に向き合って「わかりにくい問題」をどうやって共感でつなぐのか、工夫をし続けています。それはとても難しい、丁寧な作業になります。

今日はポイントを絞ってお話しいただけて、本当によかったです。今、自分なりに、どうやって仲間と共有しようかと考えていました。とても参考になりました。ありがとうございました。

#### 内田さん：

私が身近に見聞きした現場の話を紹介させてください。2013年ころ、身近なところで、三人くらい、白血病になった子供がいた。「なぜ、こんなに？」と、疑問に思ったものです。たとえば娘の友だちが、東京から引っ越してきて、原因不明の発熱となり、白血病を疑われました。「水道水が悪いのか」とか、いろいろ考えたのですが、とにかく、不安になりました。でもそれから時間が経ちまして、今でも自分は色々と感じているのに、周囲はみんな、普通にしている。「かかりつけの病院もあるし、大丈夫でしょう」と言っている。ここにある温度差は大きなもので、今もずっとあるものです。そうした中で、知り合いのお子さんが甲状腺がんになりました。その子どものお母さんは「自分が悪い」と、自責の念にかられて苦しむのです。でも、「原発」とは、考えな



い。「遺伝的なこと」を考えて、「自分が悪いのか」と苦しむ。それが、私の知っているケースです。なぜ原発事故とむすびつけられないのでしょうか。「情報が少ない」という絶望的な状況があるのです。それで、さらに「情報を得ようとするとも少ない」という現実が広がります。さらに別の知り合いのお子さんは、突然死しました。私としては「原発事故の影響かな」と思うのですが、その親御さんもそう思わない様子です。ただ、どなたでも「何か起きている」ということは、感じているようです。

私は「何も知されない中で、子どもたちを被曝させてしまった」という後悔は大きいです。そして私の子どもたちも、それぞれ社会人、大学生になりました。今、大人になった子どもたちは「福島で起きたことを説明できない」と言っています。「自分自身のこれからについて、怖さもある」とも言っています。「被ばくから身を守ろう」と友達同士で語り合えない現実が、子どもたちの間にあるのです。私たちの世代から見て言うならば、次の世代に伝えるべきことがあるはずなのに、できない、という苦しさを感じています。伝えることができれば、子どもたちが自分で自分の身を守るようになるはずなのに、と。私は今も、あきら

めないで、一步一步、きっかけを作って、若者に声をかけて、伝えたく思っています。元気なうちに、できることを、と。若者に、考える力・気づく力を育てたいと思っていますのです。

鳴原さん：

子どもが大人になって、そして、自分の身を自分で守るようになって、それを仲間と語り合えない。そんな現実が、福島県内に広がっているということは、とても重要で深刻なことだと思いました。私たちは「子育てをする側」として、自分の子どもに対して「気を付けようね」と語ります。でも、それはもちろん効果的で意味があることでしょけれど、「子どもたちの世界」はまた別に存在してる。子どもたちは、その世界で、自分自身で、選択をしていかなければならない。迷いはたくさんあるだろうと思います。その中で、子どもたちがそれぞれ、どんな判断ができるのか。親としては、心配です。

井上さんから「隠れキリシタン」の話が出た。「放射能の話」が「踏み絵」のようになっている。子どもにとってはつらいところでしょう。その「つらさ」を共有することも、親として、併せてやっていきたいと思いました。

——今日は、ずいぶん詳しい話を共有しました。それは、私にはとても重く、そして重大な事として心に残りました。皆さんそれぞれ、今日のお話はどんな風に聞こえましたか？

内田さん：

今日の井上さんの話は、よく分かりました。でも「これは難しい」と思いました。ただ、今日の話聞いて、益々「自分は現場で頑張るぞ」と思えました。

鳴原さん：

井上さんのお話は、本当に勉強になりました。内容は込み入っているのに、説明もわかりやすく、助かりました。それにしても、理解すればするほど、納得がいかない所が残ります。「アンスケア報告」は2013年にも出たということです。それなのになぜ、今、「2020年版」を出したのでしょうか。それはやはり、議論を「ある方向」へ誘導するためだろうと思われてなりません。どうして、そんなことが許されるのでしょうか。

「アンスケア報告」では、放射線被ばくについて「実測がないから推計する」というのですが、現場では「実測を止めさせられた」ということを聞きました。それでも実際には、震災直後、被ばくの測定は、一部で確かに行われていました。でも、それを「信頼性がない」ということで、全面的に一括不採用としてしまう。「機材が重いから運べない、だから正確な調査ができなかった」という、愚にもつかない言い訳も聞きました。そこ

には端的に「不作為」があったのではないかな。そう思われてなりません。

そうした中で、放射線被ばくを「推計する」となって、そして「パラメータを2020年には変更した」という。それは一貫して「影響を小さく見せる」方向へと変更している。そこに出てくる「理論」は、もう反論され論破されたようなものや、牽強付会なものばかりに見えます。「結論ありき」でパラメータを変更したと言われても、反論できないのではないかなと思うのです。

今日、そうしたことを突き付けられた気がします。納得がいかない。ご都合主義を感じる。そうした中に、私たちがあり、原発事故の「風化」が進んでいるのだと、それが良く分かりました。正直な思いを吐露しますと、憤りを感じています。

この「アンスケア報告」も、それを要約した日本語版も、すべて「統治者の目線」で書かれています。「問題ない」という議論をするための議論をしているだけです。その議論は、被ばくする当事者の目線から見れば、実に意味がないものになっていると思うのです。「事故の影響を受けて生きている人々」のいのちや心情は、まったく想定していないのだろうと思いました。

さて、そんな現実の中で、私たちは、これからどうしたらよいか、と、途方にくれます。「大したことはない」ということになって行く。そうして、私たちのように「実際に動いた人々」に無力感を与えることが、この報告書の最大の効果だろうと思います。「いまだに気にしている人」という構図が作られている。だから、意識して「被ばくを少しでも防ごうと動いている人々」をマイノリティにしない努力が必要なのだと感じました。

#### 井上さん：

「アンスケア報告」の、あるいは国連という組織の性格について、私たちは考え直さなければならぬかもしれません。それは、国際的な権威で、中立を保った組織で、科学的な立場を堅持している、ということは、幻想なのでしょう。その組織のかなめの部分には、たとえば日本政府の意見を斟酌する立場の人が必ず入ることになっています。そこには、当然、それなりの意図があるわけです。そして、そこから出てくる「報告」は、国際的な権威を帯びて、日本政府の政策遂行の裏付けとなって行く。そして、「東京五輪2020」があって「これで幕引き」という流れを、日本政府としては、希求している。つまり、そういうことだと思えます。

「2013年版」の報告書の後、「2020年版」の報告書が出ていることについて言えば、おそらくそれは、いよいよはっきりとした結論を出してきた、ということだと思えます。「2013年版」の報告書では「フクシマの事故はチェルノブイリの事故ほどのものではない」という程度までしか、結論付けられませんでした。それは「予防線を張った」というものだったのでしょうか。「2020年版」の報告書においては、あからさまに、「特別なリスクは識別できない。そんなものは見られそうにない」という結論ありきで議論を展開しています。

そうした中で、私としては、川上さんが言った通り、「30代までは生き延びろ」と、子どもたちに言いたいと思っています。子ども達の当面の被ばくリスクは、小児がんと白血病で、このリスクは30歳代まで続きます。ただ、このリスクは、追加の発がん要因を避けることで減らすことができます。たとえば「たばこ」を避けるように言いたい。そうすることで、30歳代までにがんになる可能性を「下げる」ことができる。子どもたちには「基礎疾患」を得たつもりで生きてくれ、と言いたい。そう自覚して生きることが、身を守ることだと思ふ。

また、原発被災地の「お母さん」たちは、大変な努力を払って、被ばく量を下げてくださいました。そうした努力が積み重なって、「30代まで生き延びれば、原発事故でのリスクは大きく下がる」と

いうことまでは言えるようになった、と思っています。頑張った「お母さん」たちの努力を、誰も評価していないのは、ほんとうによくないことだと思っています。小さくても、成果があった。それは大きな努力の稔りだった。そのことを確認するところに、「次」への可能性があると思うのです。

#### 千葉さん：

これからは、「一次情報にアクセスする癖を市民が身に着ける」ということが、いよいよ重要になるのだと思いました。私たちは測定を続けようと思います。そうして「一次情報」を積み上げていくことの重要性を、実感しています。これまでも、自分たちの「一次情報」を行政機関と共有することで、その一次情報は公的に「正しいもの」となる、ということを実際に見てきました。そして、「お茶会」をしながら、そうした数字を「お母さん」たちと共有して行くと、展望が開けてくると思うのです。

被ばくしないように、と意識づけられた子どもたちは、「意識高い系」とされて、孤立させられかねない現状にあります。それでも、「一次情報」をもって話をしてみると、聞く人の態度が変わるということも、これまで見てきたと思います。

#### 内田さん：

専門家や科学者が数字で表した物が全て正しいとは思えません。現場とのズレを感じる時が多くあります。統計やデータや基準値は誰から聞いた物でどこから集めた物で誰が決めた物なのか疑問に思うことがあります。福島の話は福島でしかわからない。私はここでの事実を大切に、千葉さんと共に形にして行きたいと思っています。

#### 鳴原さん：

千葉さんの話の中で「情報を行政と共有すること」そしてその共有した情報を用いることで「相手が変わる」ということが、本当に素晴らしいことだと思えました。ついつい「言っても無駄」となりがちなのに、そこを突破されている。味方を増やす、ということ。行政が話を聞くということ。感銘を受けました。

井上さんの話を伺って思いましたことは、立場を超えて、県境を越えて、つながる、ということ。素晴らしいことなのだ、ということです。「福島県内に話題が閉じ込められている」ということは、本当によくないと思ってきました。井上さんのように、そうした「よくないこと」にあらがうことが、とても重要なのだと思いました。

仲間と今日のような話を共有して、あきらめない努力を続けたい。大変なことだけれど、やってみたい。向き合い続けたいと思いました。（了）

## 「灰色の世界」と教会の役割

地域と共に「今、生きる場」で

2021年6月24日、食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会で、一つの資料が提示されました。それは土壌の放射能を計測した結果でした。その土壌は、福島駅から自動車で10分ほどの住宅密集地の敷地のものでした。その土壌の放射能は「14万ベクレル / kg」を超えていました。

私たちは、言葉を失うほどに驚きました。これほどの数値は、原発事故現場から10キロほど離れた強制避難地域の土壌から、以前に一度、計測したことがあります。その同レベルの放射能が、都会の住宅密集地に、今、ある。

私たちは「風化」ということをずっと憂いてきました。そのことを言葉にして、意識的に努力を続けてきたつもりでした。でも、この数値を見て、啞然としてしまいました。自分自身の内側に、「風化」が、これほどに浸透しているのだと、言葉を失ったのでした。

この土壌があった敷地にお住まいになっているのは、大島博幸牧師でした。大島牧師は「日本バプテスト連盟 福島主のあしあと教会」の牧師として、福島市に2年前、着任されたのでした。

何と云ってよいか、わからない、この現実。その中に、教会が建っている。そこに赴任してきてくださる牧師がいる。そして、教会と牧師は「この現実」を生きる人々と共に生きて行く。その任に当たってくださる牧師の目に、今、この現実は、どう見えているのだろう——そんなことを思っ、インタビューをさせて頂きました。

今回、ずっと福島県で牧師を続け、深く福島を愛しておられる木田恵嗣牧師にも、インタビューに加わって下さいました。木田牧師は大島牧師と共に「食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会」の委員を務めて下さり、今回の「土壌」の計測もして下さった方です。

インタビューの言葉の中から、たくさん大切なことが聞こえてくると思います。それは、例えば「コロナとワクチン」に揺れる2021年にも、そしてこれから起こって来る「何か新しいこと」にも、きっと「届く言葉」なのだと思います。それを皆さんとお分かちできますことを、深く感謝しています。

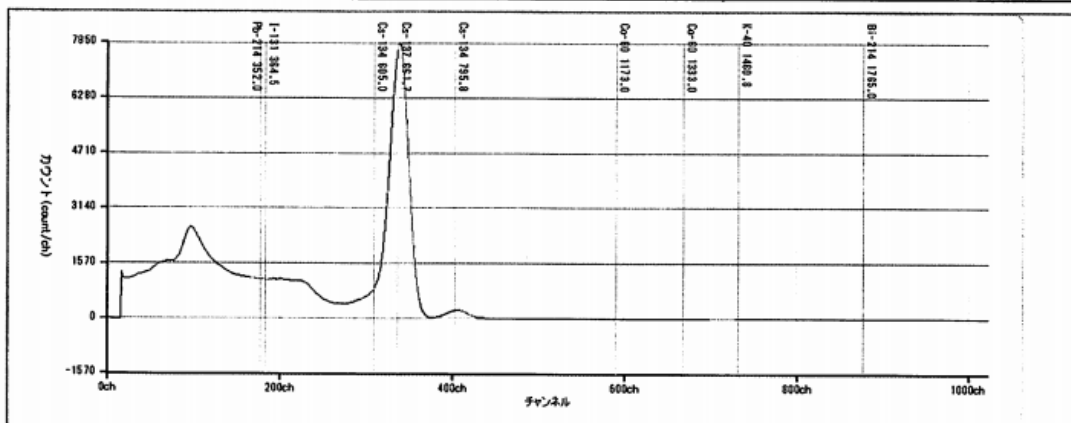
(2021年8月25日 事務局長 川上直哉 記)

### 〈検出温度計測結果〉

トータルレート	67124 cps
デッドタイム	0.0 %
ボード温度	32 °C
結晶温度	220 °C
高圧	773 V
ファインゲイン	1.132
温度補正	あり:結晶

2021年6月24日  
食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会で  
提示された計測結果

核種名	エネルギー (keV)	ネットレート (cps)	放射能濃度 ±不確かさ(3σ) (Bq/kg)	測定下限値(3σ) (Bq/kg)	判定
Cs-合計	----	209.970	142774.36±79118	単純合計 11125	検出
I-131	364.5	0.000	測定下限値未満	48.29	不検出
Cs-137	661.7	203.338	137759.58±774.86	53.01	検出
Cs-134	795.8	6.632	5014.79±159.90	58.24	検出
K-40	1460.8	0.555	5276.47±735.84	778.25	検出





——大島牧師は一昨年、埼玉から福島市へ移住してきてくださいました。

どんな歩みをされて、今に至ったか、自己紹介をしていただくことができますでしょうか。

大島博幸牧師：

私は1961年1月に北海道帯広で生まれました。その後、京都の宇治、それから愛知の豊橋へと転居しました。長くいたのは豊橋です。高校はハリストス正教の信仰によって建てられた私立高校でした。図書館に基督教の本をたくさん置いていた学校でした。「地方の私立高校」にありがちなことですが、その学校にも「挫折経験」を持った学生がたくさんいました。自分もそうだったと思います。

高校三年生の夏休みに、初めて教会に行きました。映画会があったのです。映画は「塩狩峠」でした。その原作小説を学校で読んでいましたから、興味を持ちまして、友人を誘って、初めての教会体験でした。牧師と握手したことをよく覚えています。映画会の後、礼拝に誘われまして、それから毎週、教会へ行くようになって、その年のクリスマスにはバプテスマを受け、今に至ります。

高校卒業後は「自活する」と決めていましたから、3月末に愛知を離れて埼玉へ行き、新聞奨学生となりました。豊橋の教会の牧師は心配し、反対してくれました。新幹線のホームまで牧師が来て、引き留めてくれたことが、とても印象深く思い出されます。きっと「教会に行かなくなる」と思われたのだと思います。

でも、私は埼玉県浦和市の下宿についてすぐに教会を探してもらい、土地勘のない中で色々な人の親切を頂いて、日本バプテスト浦和キリスト教会へたどり着きました。田舎から出てきた一人暮らしの若者を、教会は本当に暖かく受け入れ、育ててくれたのです。そうした中で、19歳で牧師になろうと決意しました。ビリーグラハム伝道大会で奉仕をして、二十歳の時に、ホーリネスの伝統を汲む東京聖書学院へ入学しました。当時の教会の牧師は反対しましたが、かえって私は燃えるような思いになりました。入学して、バプテスト教会に通いながら、ホーリネスの雰囲気色が濃い神学校の寮生活をして、3年間。その後、インターンでバプテスト浦和教会にお世話になりました。聖書学院の3年目の時、教会は主任牧師がいない時期を迎えます。礼拝出席が100人くらい大きな教会でした。そうした中で、月二回、礼拝説教の担当をさせて頂き、壮年会・青年会から厳しい指導をいただくことができました。そして4年間の神学校を卒業する段階になり、今度は教会からの支援を受けて、西南学院神学部へ進学しました。本当に、教会に支えられた人生だったと

思います。今に至るまで、私は教会の中で過ごしてきたのです。

西南学院の学びを終えまして、「開拓伝道」(教会のないところに教会を建てる働き)を志しました。27歳で現場に出たわけです。最初の任地は千葉県柏市でした。塾を借りて礼拝と祈祷会をし、私たち家族はアパート住まいでした。教会に人も増えてきて、8年くらいで会堂を建てることができました。8年間、充実した牧師生活をさせて頂き、柏市の地域活動にも加わりました。

その後、「宣教師」になって海外に教会を建てて行こうと志しました。ちょうどそのころ社会主義を止めて自由になったモンゴルからの要請があり、家族で行くことになりました。日本語教師の資格を取って準備を整えました。その時の勉強が、今、「福島移住女性支援ネットワーク(EIWAN)」でのボランティア活動に活かされています。ただその時は、出発の半年前に長男が重い病気になってしまい、宣教師になることは断念せざるを得なくなりました。どうしようと困っていたら、ふじみ野バプテスト教会から招聘のお話を頂きました。赴任してすぐ、教会の用地の取得と会堂建設に取り掛かることになりました。土地探しから、設計施工、経済的自立、地域との関わり、と21年間、充実した日々を過ごしました。埼玉YMCAとの関りも、この時に与えられたものです。

そして次のステップへ、と考えて、辞表を出しました。「次」については、何も決まっていたわけではなかったのですが「もう一度開拓伝道へ」と思っていました。福島の教会へと赴任が決まったのは、その後でした。東日本大震災の時、私は埼玉県での教会の働きに忙殺されて「何もできない」という思いを募らせていました。それで「せめて」との思いから、教会の祈祷会で毎月、福島と茨城県日立市の教会にはがきを出していました。次の任地として福島市の教会からのお声がけを頂くことができましたこと背景には、そうした流れもあったのだと思っています。そうして2018年5月、主のあしあと教会に着任したのでした。震災もあり、その他の困難もあり、教会はとても難しい中を歩んでいました。その歩みに伴走させていただく働きは、住む場所を探すことから始まり、そして3年目に至ったのです。こちらに来てから、木田牧師をはじめ多くの方々との出会いに恵まれつつ、「できること」を探してきた毎日でした。

——福島に現場に、本当によく来てくださいました。私たちは、本当に嬉しく感謝に思っているのです。その背後には、はがきの発信と祈りが積み上げられていたのですね。

**大島博幸牧師：**

はがきを書き続けて、何かしたいと思いつけ、でも、私は何もできなかったのです。はがきについては、実は全部がきちんと宛先に届いていたかどうか、それは、わかりません。でも、祈りは積まれていた。そう確信しています。

**木田恵嗣牧師：**

大島牧師が来た時、私はちょうど手術を受けなければならないタイミングでした。その関係で、長年続けた教誨師（刑務所や少年院等の入所者を訪ねて宗教的な支援を行うチャプレン）の役割を

誰かと交代しなければならないことになって、どうしようかと考えあぐねていた時、大島牧師と出会えたのです。そして大島牧師は、二つ返事で引き受けてくださった。助かった、と思いました。私にとっては救い主のような、助けの船を出してくださった方なのです。教誨という仕事は、牧師だけではなく神父さんや神主さん、和尚さんたちと一緒にするものです。私は長く教誨師をしてきましたから、和尚さんや神主さんの間で「木田が辞めてしまって、これからどうなるか」と心配する声も聞かれました。でも、皆さん、後から「いい人が入った」と喜びの声を聞かせてくださった。本当に感謝しています。

——大島牧師には食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会にも参加頂いて、本当に助かっています。その会議の中で、大島牧師のお住まいになっている敷地の中から、考えられないほどの高い放射能が検知されたことが報告されました。その後、追加の調査を行われたとのことですが・・・

**木田牧師**

今年の7月31日、お伺いをして、計測をしました。一ヶ月ほど前に、採取していただいた土を計測しましたところ、「1キログラム当たり14万ベクレル」という放射能だったのです。それは「最近見たことのないレベル」でした。土の量が少なかったことも、影響したのだと思ひ、改めて調べました。すると、それでもやはり「1キログラム当たり8万ベクレル」を超える放射能が確認されました。郡山市や福島市といった「福島県中通り」の地域では、今でも時々、高い放射能を検知することがあります。除染した場所でも、土壌を計測すれば「1キログラム当たり数千ベクレル」くらいは検知されることがあります。それでも、どんなに高くても「1万ベクレル」くらいまででした。



右が大島牧師。左が川上。問題の「土壌」のあった場所を確認しています。

——「1キログラム当たり8千ベクレル」を超えますと、それは「放射性廃棄物」として指定されなければならない、つまり「危険」と認められて行政が対応を余儀なくされるのです。私たちの計測事業の中では、「強制避難地域」の土から、このレベルの放射能を確認したことがありました。実に今回は、それ以来の数値でした。

**木田牧師：**

はい。そう思と、大島牧師のお住いの敷地から検出された放射能は、実に「べらぼうな数字」だと思いました。「これは何だ」と思いました。こんな放射能が今でも検出されるとは、と思ひました。住所は、福島駅から自動車で10分程度の住宅地密集地ですから、物置などのあった場所で、樋の水が流れ込む所だろうか、などと想像をしていました。実際、見てみましたら、敷地の中の、角のほうで、小屋か駐車場があった場所で、コンクリートが打たれた地面でした。そのコンクリー

トと隣家との境に20cm程度の隙間があり、そこにあった土だったのです。これはたぶん、以前そこに建物があり、除染はこれまで一度もされなかったのだろう、と思われました。

そう思いますと、これと似た場所は、実は福島市・郡山市の「あちこち」にあることを思われます。細い隙間で除染の手が入らなかった場所は、こうした放射能を持っているかもしれない。それにしても、しかし、濃縮されると、これくらいの放射能の強さになるのかと、言葉を失いました。

——そうした場所は、あちこちありそうなのですね。

木田牧師：

はい。そうなのです。この数値を見て、私は、タイムマシーンで「10年前」に、つまり原発事故の直後の福島市に連れて行ってもらったような、そんな衝撃を受けました。あの時は、あちこちで

ガイガーカウンターが警報音を鳴らしていましたから、おそらく、こうした放射能があちこちに検出されたはずだったからです。

——2011年以前の福島をご存知の木田牧師にとって、この福島は、どんな場所でしょう。

木田牧師：

自分は、群馬県の沼田で生まれ、3歳まで過ごしました。牧師であった父が転勤となって福島県郡山市に赴任したので、4歳からずっと郡山市で育ちました。高校性まで地元において、大学は仙台に行き、そして牧師になって福島市の教会に仕え、そして今は郡山市の教会で奉仕しています。幼いころからよく知っている場所が「福島県中通り」だと言えるでしょう。そのように長くいる自分には、福島で起こっていることが、あちこちからよく聞こえてくるように思います。



向き合わされました。その後、郡山の教会に異動したりと、色々なことがありました。そして今年の10周年を迎えたのです。

福島は、自然の豊かな場所です。この地の農作物の恵みは、他の所では味わえない特別のものだと思っています。今回、オリンピックで「福島の桃」がずいぶん話題になっていました。私にとって「桃」は「ご近所で分け合うもの」でした。梨も、りんごも、同じです。たくさん、豊かにあって、みんなでそれを分かち合い、喜ぶ。それは福島独特の文化なのだと思うのです。そうした中で、震災になり、桃が大量廃棄となりました。

「・・・うまいのに・・・」

とつぶやく生産者の声が忘れられません。それは何とも言えない悲しい叫びと聞こえたのです。「汚染されていて、売れない」という現実。それから10年経って、今、オリンピックの話題として「福島の桃」が話題となり、「おいしい」と評判になった。そこには「風評を払拭する」という政策が見え隠れします。諸外国からの「輸入禁止」を解くための努力だとも思います。何かとても、複雑な気持ちを抱えています。「・・・うまいんだけど・・・」というあの声と、今展開している「オリンピック関連政策」と、二つを重ねると、私は、何とも言えない気持ちになるのです。

震災の時、福島市で開拓伝道をしていました。神学校を卒業してすぐのことでした。17年間、貸家で伝道をして、それから今の福島聖書教会を建てることになったのでした。そして10年経ったところで、震災となりました。青春の一番良い時代、50歳代までの充実した時を福島市で過ごしたのだと思います。子どもたちもそこで育ちました。私にとって特別な思い出があるのが、福島市です。娘たちは、いまだに「夢の中に昔の貸家が出てくる」と言うのです。「故郷は、福島だ」と。その福島で、震災が起きました。原発事故に

——今の福島が一番の問題は何でしょうか。

木田牧師：

生活する環境全体の放射線量は、確かに下がったと言えます。そうして、普段の生活が戻ってきているとも思います。でも、土の汚染は残されたままです。解決されない問題として残っているのです。今回の問題のような例は、たくさん、残されているのだと思います。私たちの周りに、そういう場所が点在しているということです。

一時「ホットスポット」という言葉が流行りました。大規模に除染が行われましたから、今それは「マイクロ・ホットスポット」となっているのだと思います。つまり、福島が一番の問題は、細かい汚染が点在しているということにあると思うのです。そして、その「細かい汚染」のことは、

忘れられている。でも、そこには案外、高い放射能があったりする。つまり「除染して解決」とはなっていないのが現実なのです。

この影響は、これから現れるのでしょうか。まだ、10年しか経っていないのです。セシウムの半減期を考えたら、まだ、「道半ば」にすら到達していない。影響は残っていくのだらうと思います。

土の汚染は、悲しいことです。こんなに自然が美しい福島です。それだけに、言葉を失ってしまいます。美しいものの背後に、汚染の現実がある。そのことを、重く受け止めています。



——木田牧師が以前、「この世界に、白黒が付く事柄は、本当に少ししかない。ほとんどの事柄は灰色である。それが世界だ」と、原発事故の被災地の矛盾の中でおっしゃっていました。そのことを、私はよく覚えています。今まさに「灰色」の中、「白黒のつかない中」を生きる福島の人々がいる。そのお一人お一人の人生のための教会が、ここにある。その教会の働きを担う大島牧師の、今見えている展望は、どんなものとなりますでしょうか。

### 大島牧師：

自分は牧師ですから、招聘された教会があり、そこを起点に現実を見ています。「震災よりも教会のことが大変だった」という信徒さんたちと向き合ってもいます。そうですね。「今、生きる場」として、教会がある。それがどんなに素敵なのか。そのことを、みんなで確認し、分かち合っていきたいと思います。

多くの方々が教会に来られることは嬉しいことです。でも今は、それよりも「地域と生きる」ということが重要だと思っています。「私、牧師なんです」ということを地域に知ってもらって、教会が地域に開かれていく。それを考えていく。

現実問題として、放射線のことを大っぴらに語れない現状があります。「まだ、そんなことを言っている人がいるの」「風評になってよくない」と、そんな声が聞こえるのです。でも考えます。そうした声は、いったいどこに向かって生きている声なのか。

イエス様の姿を見ながら生きている時、違う声も聞こえてくるのだと思います。弱い人に向かっていく姿を見つめて、不安の中に生きる人と一緒に生きていく、そんな中で聞こえてくる声にも、意識して耳を傾け、聞き逃さないようにしたいと思っています。実に、地域に開かれていく、ということは、一色で塗りつぶせるものではありません。色々な声が聞こえてきます。その色々な声を、聞き取らなければなりません。どうやってそれを一つずつ聞き取るのか、それが課題だと思っています。

牧師として生きている自分の生き方を人に伝えることが、まず役割かと思っています。そして、共に生きる人の声を聴くことです。原発被災当事者とは違う「私」が、過去の現場からの声に学びながら、10年経った今、あの時の関りは今どうなったのか、それが今どうつながっていくのか、考えています。

木田牧師がおっしゃった「福島の豊かな自然」については、本当に肌身に感じているところです。福島駅から自動車で1時間かからない距離にある吾妻山に、毎年、雪が積もります、その姿がとても美しく、うれしくて、着任当初、写真を撮ってみんなに見せたら、「そんなのいつものことです！」と笑われました。でも、それくらい豊か

だと、私は日々、感動しています。感動すること。それが他所から福島にやってきた自分の役割ではないか。そう思っています。

そのためにも、この地域を知ること、今は尽力し、「生協」の活動にも加わりました。福島県内の「道の駅」を訪ねて、もう二周もしました。どんどん、地域が大好きになっている自分があります。



福島県内の「道の駅」

そうしてやはり、まず教会を大切に、自分の活動を教会に分け合い、祈ってもらっています。教会のみなさんと信仰の広がり分かち合いたいと思っています。それがみんなを元気づけることになると思うのです。教誨師の働きは、そうしたことの代表だと思っています。それからたとえば、先に触れた「福島移住女性ネットワーク (EIWAN)」での日本語教室での働きも、継続がゆるされて、フィリピンから移住してこられた方々とのよい人間関係が生まれ、生活相談も受けられるようになりました。福島市国際交流協会とのつながりが、教会のネットワークの中から与えられて「異文化交流カフェができるかもしれない」と、今、話し合いが進んでいます。教会の広がり、福音の豊かさ。そうしたことをみんなと分かち合うことができると、励んでいます。

**——木田牧師は、これからの課題と展望を、どのようにお語り下さいますか？****木田牧師：**

震災後の10年を過ごしてきた中で「自分に何ができるか」を考えてきました。そうして、クリスチャンとして、祈りあう為のネットワークが大切だ、と考えるようになっていきます。祈り合うためのネットワークが豊かに祝されること。それが、今の願いです。そのために努力をしています。

ここにある現実には、政府が言っている「きれいになった福島」ではありません。問題を抱えながら、それでも前を向いて生活をしている人がいる、それが現実の福島の姿です。そうした現実を分かち合い祈る、そんなグループができるといいなと、そんなことをささやかに、思っています。「10年経ったから おしまい」「オリンピックで幕引き」ということではないはずですが、でも、そうしようとする勢いは確かに感じられます。ですから、そこに「祈りの継続」が必要なんだ、と、そんなことを思っています。

**——それにしても、敷地内の高い放射能は、困りました。****大島牧師：**

はい。あの「土」のことを市役所にお話ししたら、やっぱり、びっくりしていました。今、この物件を管理しておられる不動産業者とも話し合いながら、行政とじっくり話し合っていく段取りをつけています。

大島牧師のような方がこられて、一緒に活動ができて、一緒に被災地を回って、計測事業を一緒にしたり——それは、うれしいこと、心強いことです。今、大島牧師がおっしゃった事、大島牧師が今しておられることは、自分も心掛けていました。大島牧師の姿勢から、たくさん学んでいます。地域とのパイプが大事なのだと、教えられています。

**大島牧師：**

木田牧師も関わられた「福島教会支援ネットワーク (FCN)」は、今も活動を続けています。今年「10周年の3月11日」を覚えて、企画を立てました。3月11日の午後2時46分に、それぞれ、祈る。登録だけでもいい、お互いに、共に祈る、というものでした。10の教会が参加してくださいました。普段つながりのない教会も、そこに加わり、感謝でした。

**木田牧師：**

行政の筋道を作っていくことは、とても大切なことだと思います。できることは、何でもお手伝いしたいと思います。一緒にやっていきましょう。

冠雪した吾妻小富士。  
(撮影：大島牧師)





# 収支計算書（全体）

2021年4月～2022年3月

2021.6.24現在

（単位：円）

	4月	5月	6月	7～3月	計
会費収入	-	-	5,000	-	5,000
献金収入	696,000	260,368	309,851	-	1,266,219
預金利息	2	-	-	-	2
収入計	696,002	260,368	314,851	-	1,271,221
給料手当	180,000	180,000	180,000	-	540,000
法定福利費	11,408	11,408	11,408	-	34,224
新聞図書費	21,242	11,749	25,820	-	58,811
通信費	49,356	36,406	31,293	-	117,055
支払手数料	6,250	3,568	3,093	-	12,911
外注費	38,500	38,500	38,500	-	115,500
事務費	65,812	46,461	35,983	-	148,256
広告宣伝費	70,791	-	-	-	70,791
旅費交通費	80,996	17,780	18,930	-	117,706
燃料費	20,000	16,500	10,000	-	46,500
会議費	57,897	15,019	5,580	-	78,496
支援費	260,260	208,826	122,153	-	591,239
支出計	862,512	586,217	482,760	-	1,931,489
収支差額	-166,510	-325,849	-167,909	-	-660,268
				前期繰越	3,813,274
				次期繰越	3,153,006

会計報告を致します。1頁の「事務局報告」と共に、ご高覧下さい。

上記は、全ての確認を終えた会計報告となります。現在、事務局で会計を管理しつつ、その帳簿の管理などを有償ボランティアの方に（心から感謝しております）お手伝いいただいております。尊いご献金を適切に管理するために、このボランティアの方のご労は、本当に貴重で有難いものとなっています。こうしたお一人おひとりのお心に支えられた「10年」でした。

下記は、事務局が理事会毎に提出している会計概算報告となります。献金件数の多さに、毎回、驚きを覚え、感謝を深めています。

ご献金者御芳名は、紙幅の関係上、次号（クリスマス号）に、まとめさせていただきます。

（2021年8月26日 事務局長 記）

2021年度				2020年度				2019年度			
	献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	出金額
4月決算	44	696,000	862,512	4月決算	63	608,955	648,504	4月決算	36	846,680	613,699
5月決算	36	260,368	586,217	5月決算	29	288,003	508,759	5月決算	28	574,367	410,983
6月	25	456,788	483,470	6月決算	22	393,534	431,418	6月決算	24	320,250	802,854
7月	10	302,940	800,382	7月決算	39	315,500	472,797	7月決算	26	393,808	657,942
				8月決算	28	372,750	515,403	8月決算	21	379,512	701,435
				9月決算	21	235,540	576,944	9月決算	47	486,250	740,990
				10月決算	22	252,700	673,533	10月決算	32	556,342	411,140
				11月決算	55	707,107	541,906	11月決算	24	1,269,081	937,925
				12月決算	121	1,349,247	948,372	12月決算	103	1,534,806	638,115
				1月決算	56	914,004	505,016	1月決算	42	552,356	761,226
				2月決算	47	719,430	1,130,631	2月決算	32	423,225	532,311
				3月決算	101	1,175,511	782,445	3月決算	49	1,278,696	968,719
				持続化給付金		2,000,000					
合計	115	1,716,096	2,732,581	合計	604	9,332,281	7,735,728	合計	464	8,615,373	8,177,339

進捗率			進捗率			7/26現在の資産			
日数	収入	支出	日数	収入	支出				
33%	25%	39%	100%	133%	111%	通帳1	¥1,646,594		
(365日で7月26日まで)			(700万円の予算対比)			(700万円の予算対比)		通帳2	¥229,471
						扶助基金	¥277,944		
						振込口座	¥679,053		
						合計	¥2,833,062		





## 支援金・献金の受付口座

### 【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

### 【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

小河義伸（日本バプテスト仙台基督教会牧師）

※肩書等は、すべて2020年6月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : [sendai@tohokuhelp.com](mailto:sendai@tohokuhelp.com)